専門家から学び、研究をさらに深める

SGH集約講演　　AKB Future Project 推進委員会

■実施日　平成 30 年９月１４日（金）　13:30-15:20　　■生　徒　５回生（７４名）

■講　演

・『食品ロスの現状と対策』　（北海道農政部食品政策課　主幹　堀田　貴明氏）

・『人体に必要な栄養とその効果的な摂取』　（天使大学　教授　山口　敦子氏）

・『みんなが幸せになる農業経営』　（JA 北海道中央会　営農指導課　高柳　泰斗氏）

・『北海道農業の現状とその課題⇒ビジネスを学ぶ』　（帯広畜産大学　教授　仙北谷　康氏）

・『日本と北海道の漁業資源』　（北海道漁連室蘭支店　主任　小川　仁氏）

今年度も「集約講演」が行われ、５回生は各自の課題研究テーマに関連のある講座に参加し、前半は専門家による講義、後半は「ワークショップ」によりそれぞれのテーマをさらに掘り下げました。

◆『食品ロスの現状と対策』

北海道農政部が主導する「どさんこ愛食食べきり運動」は、食品の製造、卸、小売の各段階、また外食産業や一般家庭で生じる食品ロスの要因を徹底的に分析し、活用できるあらゆるネットワークを用いて、食品ロスによる環境への負荷、経済的ロス、世界の食糧不均衡を解消しようという取組です。「食品ロス削減」は今年度は複数のグループの研究テーマであり、後半のワークショップでは活発な質疑や討論が見られました。生徒たちは行政がこれだけ本格的にこのような取組を行っていることに、さらに興味が沸いた様子でした。

◆『人体に必要な栄養とその効果的な摂取』

講演では、人類は歴史の初めから、どんな食物により必要栄養を得てきたのか、また現代に至るまでの日本人の食生活の変遷と、現代人が持つ課題、また今後の社会において「健康寿命」を延ばすための効果的な栄養摂取方法が紹介されました。後半のワークショップでは、野生動物から昆虫に至るまで、「新しい食材」について研究する生徒たちの様々な質問に対し、栄養面や実現可能性などを中心に、専門的知識を基に丁寧に解説していただきました。

◆『みんなが幸せになる農業経営』

前半は、高齢化が進む中での労働力確保と国際的な競争力維持のための取組について紹介していただきました。その中の１つであり、現在新しく浸透しつつある「GAP」（日本語では「農業生産工程管理」）という農産物の認証制度では、生産者と消費者両方の満足と国際的な評価の向上を目指しているそうです。またAIやIoT（Internet of Thingsの略。身の回りの物を通信機能により制御したりする技術）、自動化やロボット技術の本格導入による「スマート農業」の将来像についても説明されました。後半は、これらの取組が直面する課題や限界、また生徒たちが研究に取り組む「規格外品の活用」や「過剰生産による廃棄の問題」などの話題について活発な議論がありました。

◆『北海道農業の現状とその課題⇒ビジネスを学ぶ』

前半は、労働力及び後継者不足などを始めとする北海道農業の課題を解決するため、経済効率やリスクを緻密に分析し、継続して利益を生み出す仕組みを示す「ビジネスプラン」の重要性を説明していただきました。また、ビジネスが成立する上で必要な、ニーズの発見、ニーズの提案、ニーズを持つ人と接点を持つこと、パートナーを見つけること、コストと利益の見積もりなど、具体例に基づいて学びました。後半は実際にグループに分かれてビジネスモデルを立てる演習を行い、農業経済学の基礎について学びました。

◆『日本と北海道の漁業資源』

講演は日本と世界の漁業の現状やこれからの課題等、事前に提出した生徒の質問に基づいてのお話。食生活に変化が生まれ、日本の魚の消費量の減少にもかかわらず、世界的には消費量が増え、乱獲が進んでいることなど、生徒の質問内容を豊富なスライド資料と共に説明していただきました。後半のワークショップでは、「外来魚や商品価値の低い魚の活用」や「深海魚の養殖」など、生徒のユニークなアイデアに対して、実現の可能性や課題など、丁寧に解説していただきました。

今回の講演を通して、多くの生徒は、問題解決の方法として挙げたアイデアの多くがすでに実用化されていることを知ったり、自分たちの研究の方向性が適正かどうか見直したりする貴重な機会となりました。このような過程を通して、必要により軌道修

正しながら、生徒たちは研究を続けていきます。